
先生。～m e e t a g a i n～

ジェレミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生。より～（続編）あれから2年。主婦・はる

【著者名】

ジムニー

N4953E

【あらすじ】

完結済小説「先生。より～（続編）あれから2年。主婦・はるかと、歯科医師・前田の束の間の再会。

変わらぬ先生。

11月。

前田先生と初めて出会ったあの日から、一度目の秋を迎えていた。日が短くなつたと感じながら、洗濯物を片付けてパソコンを開いた。

検索結果の画面を見ながら、一人呆然と座り込んでいた。

先生が神戸に帰つたと聞かされたのが1年半前。

パソコンを開いては時々、先生の名前を検索していた。

どこで働いているのか

元気にしているのか

ただそれが知りたいだけだつた。

元気ならそれでいい・・・

そんな軽い気持ちで検索していくが、この1年半、前田先生らしき人にヒットすることはなかつた。

それが

1ヶ月ぶりに先生の名前を入力すると、今まで出ることのなかつた検索結果が・・・

「 齒科クリニック 院長 前田晋一」

名前のみで、“歯科医”と入力したわけでもないのに、歯科クリニックの院長として出た名前。

前田畠一

一文字も狂うことなく、同姓同名。

歯科医で、同じ名前で、別人である確立はどれくらい?

間違いなく前田先生だと確信していくても、そんな疑問が頭をよぎる。

果然としたのは、先生の名前がヒットしたからじゃない。

院長と記されたクリニックの所在地は、ここから數十分離れただけの・・・隣町

トクン トクン トクン トクン

2年前を思い出すかのように、胸の鼓動が鳴り始める

ギリして

どうしてここにいるの?

神戸じゃなかつたの?

いつから?

いつから?

前田先生・・・

ビリビリ？

震えた手でマウスを動かし、クリーナーのページを開く。

「歯科クリーナー 一般歯科 インプラント 痢美歯科 矯正
歯科 予防歯科 ホワイトニング スポーツ歯科

総院長 伊戸田 肇

院長 前田晋一

トクンシ・・・

「一・・・せん・・せい・・・・

あの頃と変わらない、前田先生の顔写真がそこにあった。
凛々しい切れ長の目
額からスッとのびた高い鼻
今にも声が聞こえてきそうな・・・
インターネットに掲載された、ただの顔写真なのに、息を呑んで見
惚れてしまう
顔が熱くなつていく

どうして・・・こんなに近くにいるの・・・

携帯電話を手に取り、麻耶ちゃんにメールを送った。

『前田先生 見つけたかも』

「どうしたらしいのか わからない

先生がいた

思いがけないところに

先生はいた

いないと思つていたはずの先生

もつねえないと思つていた

先生・・・

「来週の水曜日、出張になつたんだ」

仕事から帰つた和晃が、ビールを一口飲んでから言つた。

「出張?どこに?」

「大阪。今井さんと

「えつそれつて・・・

「そ。名田は出張だけど、食べ歩きだよ」

「ええーいいなあ~。それ食事代全部会社もちでしょー?」

「仕事の一環だからね。だけど、間を空けずに朝から晩まで食べなきやなんないんだよ。結構ツライんだって」

「あ～、そういうえば、東京の食べ歩きの時も、後半はかなり辛かつたつて言つてたね。」

「んんー・・またあの地獄のような食べ歩きかあ・・・」

「初めっからとばして食べるからでしょ。少しずつ味見程度に食べないと」

「そりなんだけどねー。美味しいことつこつに食べちゃうんだなこれが

「ふうーん・・・うらやましー」

「水曜の昼から出発して、木曜の夜帰るから」

「あ、泊まりなんだ」

「うん。ごめんね。はるか・・1人になるね・・・」

「あはは、気にしないで。大丈夫だから」

1年前、和晃にいわゆる“メルカノ”がいたことが発覚して以来、和晃はそれまでに比べてより一層優しく、私を思いやつてくれるようになった。

和晃なりの誠意なのだろう。

私は素直にそれを受け入れてきた。

怒りや憎しみを抱いたまま生きていくのはしんどい。

和晃を許そうと決めたあの日から、穏やかな日々が続いていた。

なのに・・・

「・・・だからね」

「・・・は?」

「ええつ!?

「あ、ごめん。もっかい言って」

「大丈夫？はるか・眠たい？」

「あ、うん、少しね。で、何て？」

「昼の新幹線だから、朝はゆっくりでいいからね」

「うん、わかつた。来週の水曜日ね」

サインペンを手に取り、リビングのカレンダーにしるしをつけた。

11月12日水曜日 和晃・大阪出張・・・

一瞬、よからぬことが頭をよぎる

前田先生に　会いに行こつか・・・

「（）ちそつさまでした」

食事を終えた和晃が、食器をシンクへ運ぶ。

「お風呂入つてね、和晃」

「うん。じゃあお先～」

浴室の扉が閉まる音を確認してから、自分の携帯電話を開いた。

着信メールあり

麻耶ちゃんだ

『うそー?どこで?ネットで!?』

着信は0時14分。

もうすでに深夜の2時を回っている。

返信はしないでおくことにした。

『 もうらん会いに行くんやろー! 』

仕事の昼休みに、麻耶ちゃんが電話をかけてきた。

やや興奮気味だ。

「 ー・・・ 」

『 何? ? 迷つとんの? はるちゃん 』

「 ー・・・ うん・・・ 」

『 なんだなん? ザツと会いたかつてんやろ? 神戸まで行つてんやん
か! やつと見つかったんやんかー! ! ! 』

「 うん、 もうだけど・・・ 」

『 はるちゃん・・・ 』

「 先生に会って会いたい 」

『 うん 』

「 でも・・いいのかな・・行つたりして 」

『 ああーわかった。はるちゃん、行けつて話つてしまじこんやろ? ワ
チに 』

「 え? 」

「 ー・・・ うん 」

『 はるちゃん。悪いけどウチは何があつてもはるちゃんの味方や
和晃さんは申し訳ないけど、ウチははるちゃんの気持ち最優先や
でさあ 』

「 ー・・・ ううだね・・・ 」

『 うん。とにかくウチは絶対会いに行くべきやと想つわ。あんない
なくなり方してんやし、何か聞きに行つてもえんちゅうへ 』

『 はるちゃん、今でも先生が好きなん? 』

「 ー・・・ 好き・・・ かな。でも 」

『 でもはない。それならそれでええやん。好きやから会つて行く。
顔見に行くくらいええのんよ 』

「 うん・・・ 」

『 聞きたこにもたくさんあんねやろ? 』

「・・・ある」

『ほな、ちやんと聞いてきいよ?』

「うん」

『大丈夫やつて。はるちやんは、自分で思つてゐよつずつとしつかりしとるし、間違ひ犯したりはせえへんよ』

「うん・・・わかつた。行つてみる」

『おお! その意氣その意氣』

「ありがとう、麻耶ちゃん」

『もお~、ほんま頼むわあ~。今度ウチが恋愛で悩んだ時は、はるちやんにいつぱい相談に乗つてもらひうだな』

「アハハッ、うん! 必ずね」

麻耶ちゃんの言つ通りだ。

私は背中を押してもらいたかった。

麻耶ちゃんなら、「絶対に会いに行くべきだ」と言つだらうと、頭で予想していた。

麻耶ちゃんと話すことで、自分の気持ちを確かめたかったのかもしない。

先生に、会いたいといつ気持ちを。

先生と会つと決めてからは、待ち遠しい反面、本当に行つてもいいのだろうかと、迷いとの葛藤が続いた。

和晃がいないときは先生を想い、和晃が帰つてくると、自分への嫌悪感が募つた。

早くその日が来て欲しいと思えばなかなか来ないが、来て欲しくなと思つとすぐにやつて来る。

和晃の出張の日は、一瞬でやつて來た。

迷っている、本当に黙っていてもいいのか、でも、やつぱり会いたい。
当田はもう、自分でもよくわからなかつた。
とにかく行ってみよう。
それだけだつた。

「何時の新幹線？」

「コーヒーを飲みながら、テーブルの向かいで遅めの朝食を摂る和晃
に聞いた。

「13時ちょうどの・・東京行きつて言つてたかな。切符は今井さ
んが持つてるから」

「送ろうか？駅まで」

「いや、今井さんがタクシーでここに寄つてくれるから・・つて、
この前も言つたけど」

和晃が目を細めて私を見る。

「あつ・・そうだつたね・・アハハ・・」

そんなこと言つてただろうか。この前つていつ？
「なに？なんかうわの空みたいだけど」

「私？ そつかな」

「大丈夫？ホントに1人で」

「大丈夫ですっ」

「あ、でも、はるかも今日出掛けんのだよね？」
一瞬、ドキッとした。

「うん、友里とね」

そういうえば以前も、前田先生に会いに行く時は、よく友里を言い訳
にしていた。

今回も、友里しか浮かばなかつた。友里と和晃は全く接点がないた

め、何か知られる心配もない。

「夜の食事だろ？ 気をつけて帰るんだよ。」

「はい」

30分ほど経つて、和晃の携帯が鳴った。

「もしもし・・おはようござります・・はい、あ、はい、じゃ、下
に行きます・・はーい」

和晃は携帯をポケットに入れると、1泊分の荷物の入ったバッグを持って玄関へ向かった。

「今井さん、着いたつて？」

「うん、今、下にいるつて」

「じゃあ、今井さんにようじぐ。また今度“デイル”に食べに行きますつて言つといてよ」

「うん、わかった。じゃあ、いつきます」

「うん、いつてらっしゃい。気をつけて」

「はるかも。戸締りしつかりね。連絡するから」

「うん」

玄関の扉が閉まる。

鍵をかけるのと同時に、ため息が漏れた。

「ハア・・・」

「ごめんね和晃・・・

どうしても会いたいの

今回だけ・・一度会いに行くだけだから・・・

2年前は、前田先生に会いに行こうが、和晃に対する罪悪感はなかった。

でも、今は違う。

無性に罪悪感に苛まれていた。

時間が経ってしまったせいか。

2年前より、和晃に愛されていると実感するようになつたせいか。

先生を好きな気持ちは、2年前のままなのに。

寝室のタンスの奥から、隠していた封筒を取り出した。

中には、先生を好きだと思ったあの日、思わずネットの顔写真をプリントアウトした紙と、先生と一緒に行つたラグビー観戦の半券が入つてゐる。

そして、携帯電話にぶら下がつた、ラグビーボールのストラップ。

私が会いに行つたら、先生はどんな顔をするだらう。

今日はクリニックにいるのだろうか。

学会やセミナーで、県外へ行つてゐる可能性だつてある。

約束もせず、一方的に会いに行つて・・・

本当に会えるのだろうか。

封筒の中身を取り出して眺める。

この前ネットで見た先生の顔と、着ている服以外は何も変わつていない。

半券は少し、茶色く色褪せていた。

今でも鮮明によみがえる競技場での記憶。

けれど、その半券の色は、2年という歳月を確実に物語つていた。

久しぶりのおしゃれをして、19時半に家を出た。

前田先生が今現在勤務するクリニックは、以前のオフィス街とは違
い、デパートや飲食店が立ち並ぶ市街地のビルにある。

バスの窓から外を眺めると、夜の街の光が、色づいた銀杏を照らし
ている。

そう。

先生に初めて会ったあの日も、さわやかな秋空の下に、銀杏がさら
さらと輝いていた。

私はこれから先もずっと、この季節が来るたびに、先生とのことを
思い出すのだろう。

クリニックのあるビルは、意外に早く見つかった。

ビルを見て、改めてショックを受けた。

先生がいなくなつてからも、ショッピングで何度かこのビルの前を
通つたことがある。

こんなに近くにいたのかと、同じショックが何度も襲う。
なんだか胸が、ドキドキしてきた。

エレベーターで7階に上ると、扉の前にすぐに受付があり、フロ
ア全体が歯科クリニックになつていた。

あの、歯科特有のにおいが鼻を突く。

先生が前にいたクリニックと同じで、内装がとてもキレイだ。
受付カウンターに座る若い女性に、すぐに声をかけられた。

「こんばんは。ご予約でしょうか?」

「あ、いえ、あのう・・・

「はい?」

「いらっしゃい・・前田先生はいらっしゃいますか?」

「あ、はい、おつますが・・前田晋一でしうつか?」

女性は不思議そうな顔をしている。

「・・・はい」

「えーと、あのう失礼ですが、どういったご用件でしょうか?」

「あ・・その・・お会いできますか?」

「はい・・・あの、只今他の患者様の治療に当たっておりますので、しばらくお待ち頂いてもよろしいでしょうか?」

「・・・はい」

「お名前を伺つてもよろしいですか?」

「・・・春日部です・・・」

「春日部様ですね。前田の方にお伝えして参りますので、おかげになつてお待ち下さい。」

女性は愛想よく立ち上がり、待合室のソファーアームの端に座つた。

待合室には静かに音楽が流れている。

時間が遅いせいか、自分以外は誰もいない。

先生は、私の名前を聞いてびつびつ思つだらう。

先生は、私を見てどんな顔をするだらう。

緊張が増していく。

本当に、来てよかつたのだろうか。

今頃になつて

こんなところへ

思わず、息を呑む

ダークグレーのシャツに黒いネクタイ、長い白衣に黒のズボン。白衣の袖は、相変わらず肘まで捲くられていて、左手にカルテを持つている。

背は、そんなに高くない。

2年前と変わらない、前田先生がそこにいた。

私は立ち上がり

驚きに満ちた表情で、先生は私を見ている。

「…………はるかさん…………」

胸の鼓動が 高鳴る

声が出ない

「…………」

受付の女性が、こちらを横目で見ながらカウンターへ戻ってきた。

何か・・

何か言わなきゃ

「あつ・・あのう・・私・・」

「はるかさん・・・」

先生は、受付カウンターにある置時計を見て言った。

「西通りにある、“オルヌ”っていうカフェで待っててくれませんか?」

受付の女性を気にしてか、若干小声だった。

先生は、困ったような顔をしている。

どうしよう・・・

やつぱり来るべきじや・・・

「終わつたら必ず行くから

先生は、真っ直ぐ私を見て言つと、私の返事を聞かずに診療室へ戻つて行つた。

ビルを出て、西通りへ向かつ。

足取りが重い。

先生の、困った表情が、頭から離れない。

きっと、迷惑だつたに違いない

2年ぶりに会えた先生

あんなに探し求めて、会いたかった先生

長かった2年

先生にとっては、どんな2年だったのだろう

私とのことは、もう、過ぎたことなのだろうか

あのラグビーの半券のよつこ

色褪せてしまったのだらうか。

先生の想い。

カフェ“オルヌ”は、西通りにある小さなお店だった。ぼんやり歩いていた私は、もう少しで見逃すところだった。

ガラス扉を開けると、落ち着いたジャズ音楽と、強烈なコーヒーの薰りに全身が包まれた。

モダンな造りの店の奥には、5人掛けのカウンターがあり、カウンターの中から50代くらいの男性がカップを拭きながらこちらを見た。

「いらっしゃい」

カウンター以外に、2人掛けのテーブルが4つ。

マスターらしき人に軽く会釈をしてから、奥から2番目のテーブルの椅子に座る。

テーブルに備えてある小さなメニューを見ていると、マスターと一緒に年くらいの女性がお水を運んできた。夫婦で営んでいるお店なのだろうか。

お客様は私1人だ。

「こんばんは。何になさいます？」

「あ・・じゃあ、カプチーノを」

「はい。少々お待ち下さいね。」

女性は笑顔を向けると、マスターに「カプチーノ」と伝えた。

携帯電話を開くと、21時になろうとしていた。

先生は、仕事が終わったら必ず来ると言っていた。

このお店は何時まで開いているのだろう・・

水の入ったグラスの氷がカラーンと鳴った。

前田先生が来たら、何と言えばいいだろう。

聞きたことはたくさんある。

ちゃんと言葉でできるだろ？

2年前のよう、何も言えずに、何も聞かずに、後悔するよな」とだけはしたくない。

やつと見つけたのだから

やつと会えたのだから

手に握りしめていた携帯電話のメール着信音が鳴り、ハツとした。

和晃だ。

『はるか、食事は済んだ？俺は今、梅田にあるホテルに着いたよ。こっちに到着した直後から食べっぱなしでお腹いっぱい。今から今井さんと部屋で飲みます。また寝る前にメールするよ』

返信はせずに、そのまま閉じた。

運ばれてきたカプチーノから、ふわふわと立つ湯気をぼんやり見ていた。

先生はいつも来るだらつ

どのくらいで来るだらつ

忙しい時に、邪魔をしてしまったのではないか

後ろ向きな考え方ばかりが、浮かんでは消える

そういうえば、先生にはいつも待たせている

初めて駅前の“ブレイク”で2人で会ったときも

ラグビー観戦の日の競技場でも

そして1年半

こんな日が来るのを、私は心のどこかで待っていた

「こうしちゃ」というマスターの声につられて、入口の方を見た

前田先生

走って来たのか、鼻の頭に少し汗を滲ませて、私に微笑みながら近づいてくる。

「マスター、僕、エスプレッソ

先生がマスターに声をかけると、マスターは何も言わずにただ頷いた。

先生は黒のジャケットを着て、手には何も持っていない。
優しく笑いながら、テーブルの向かいに座る。

「『めんね・・・待たせて』

あの頃と同じ、変わらない笑顔

私はこの笑顔に、ただ惹かれていくばかりだった

「すみません・・・突然・・・」

「いや・・・いいんだ・・・よく、あそこ（クリーツク）がわかつたね」

「あ・・、ネットで見つけたんです・・先生の名前を・・・」

なんだか、まともに先生の顔が見られない

「そつか・・・・・元気だつた?はるかさん・・」

「一・・・・はい」

先生が目の前にいるのに、どことなく実感が湧かない
現実なのに、現実ではないような気分

「神戸に・・お帰りになつたんじゃなかつたんですか・・?」

「一・・ああ・・まあ、一度は帰つたんだけどね。でもやつぱり、
こつちに10年以上いたから、暮らしやすくてね・・また戻ること
にしたんだ。」

「・・・・」

「今働いてる・・あそこさ、大学の時の同じラグビー部だつた伊戸
田つていう先輩が開業したんだけど、こつちに戻るうかつて考へて
る時に、院長やらないかつて誘われてね・・」

「・・・そうですか・・・・」

「うん・・・」

「いつから・・あのクリニックで・・・?」

「そろそろ1年くらいかな・・正式に院長になつたのは最近なんだ

けどね」

だから、名前はずつとヒットしなかつたんだ・・

1年も前から・・じつに・・

「・・・神戸に・・・行つたんです・・

「え・・・?」

「1年半前・・。先生がいなくなつたって知つた後に・・・

「・・・・・」

驚いた表情で、どこを見るというわけでもなく、先生の目が動く

「・・・僕を・・・探しに・・?」

先生は、遠慮がちな苦笑いを浮かべた

「・・・いえ・・、そんな途方もないことは・・・

「あつ・・ハハツ、そうだよね」

「・・・先生が、生まれ育つた街を見てみたくなつて・・

「・・そつか。そうだつたんだ・・。どうだつた? 神戸は

「素敵な街でした・・すぐ。初日は、北野を歩いて、夜はメリケンパークに夜景を見に行つて・・。ポートタワーが綺麗で・・ホントに」

「うん・・神戸の夜景は僕も好きなんだ。そつかあ・・行つてきたのかあ・・・」

少しだけ、張り詰めていた空気が和んだ気がした

「はい、エスプレッソお待たせ」

マスターが先生の前にエスプレッソを置いた。

新しい「コーヒーの薫りが漂う。

先生は、ゆっくりカップを持ち、薫りを楽しむように一口飲んだ

「・・・どうして・・、前のクリニック、お辞めになつたんですか

？」

思い切って聞いてみると、先生は口元に笑みを浮かべて下向き加減に答える

「んー・・・いろいろあってね・・・総院長との考え方の違いとか・・他にもね」

「ー・・・定期検診で、次の春にまたお会いできると思つてたんですけど」

「うん・・・ごめんね。僕が診てあげるつて言つたのに」

謝られると、胸の奥が、きつく締め付けられる

「・・・ストラップ・・・ありがとうございます」

「あ・・・ちゃんと受け取つてくれたんだ」

「・・・はい。加護先生から渡されて」

いなくなつた先生を想い、絶望感に苛まれていた時だった

「何か・・・残しておきたくてね。はるかさんには、ラグビーも一緒に観に行つてもらつたし、お礼のつもりだつたんだ」

「お礼・・・」

ペアであるはずのもう一つのストラップは、先生が持つているんですか？

・・・聞きたいのに・・・聞く勇気がない

「私の連絡先を、先生に伝えていただけるように頼んでみたんです
が・・・聞いていませんか？」

「え・・・? そななの？」

やつぱり・・・伝わつていなかつた

「いつ？」

「いえ・・・いいんです」

今はもう・・・そんなことどうだつていい
冷たくなつたカプチーノの残りを飲み干す

「そろそろ・・時間なんだが・・」

申し訳なさそうに、マスターが近づいてきて言った。

「あつ、すみません、そつだつた。お幾らですか？」

「1200円ね」

先生が財布を出して、お金を払う

「いつも来てくれるのに、すまないね」

「いえ、時間は時間ですから」

マスターは先生から2000円受け取ると、カウンターにあるレジにお釣りを取りに行つた。

「いつも・・いらしてますか?」

私が尋ねると、先生は残りのエスプレッソを一気に飲んで言った
「うん。いつもつていうか、時々だけど、11:23時までやつてる
し、帰り道だしね」

「そなんですか」

マスターが先生にお釣りを渡す。

「また来てよ」

「うん。」^{じちそうせま}

出口に向かう先生に、私も続く

「じちそうさまでした」

「ありがとう。また来てね」

マスターが微笑む

「はい」

頷いてから、店を出た。

ネオン輝く夜の街を、先生と2人、並んで歩く。

「あのう、コーヒーのお金…」

「ああ、いいよ全然。ごちそうさせて」

「スママセン…」

「家の近くまで送りうつか?」

先生の車に2人…自分の気持ちが、抑えられなくなる気がした

「あつ、いえ、いいんです。バスで帰ります」

「…じゃあ、バス停まで」

「…」

「ん?」

「前にも、同じようなことありましたね」

「前?」

「ハイ、先生が、学会で東京に行かなきゃいけない日に、一緒に“ブレイク”でコーヒーを飲んで、その後駅前のバス停まで歩いて…」

「ああ、そうだ。そうだったね。クリスマス前かなんかだったよね」

「ハイ」

先生は、優しく微笑む

「今日はどこから乗るの?」

「あ、中央通りからです」

「そつか。じゃ、二つ通りついでにこうか。ちょっと遠回りになるけど。時間大丈夫?」

先生は、公園を指差す

少しだけ長く、先生と歩ける

「はい・・大丈夫です」

公園の遊歩道は、木々の間から差し込むネオンの光と、所々に建つ街灯の光で、比較的明るくなっていた。

中央広場には、遊ぶ子供のいない淋しげな遊具が、静かにそこにあ
る。

「仕事の帰りにね、時々通るんだ。街中を歩くのもいいけど、こっ
ちの方が空気が澄んでる気がしてわ」

「……そうですね」

2人並んで歩く足音と、お互いの声が、やけにはつきり聞こえる。
周りには誰もいない。

「……はるかさん」

トクンッ・・・・

先生にそう呼ばれると、胸の鼓動が鳴り止まなくなる

「・・・会いに来てくれてありがとう」「・・・いえ・・・突然で・・返って申し訳なかつたかなつて・・」「いや・・正直、驚いたんだ。もう・・会うことはないだろうと思
つていたし」「・・・」

歩く足が、止まった

「先生」

「はるかさん」

私の言葉を遮るように、元気の田の前に立つた

真っ直ぐな目

「もつ・・・わかっていると思ひナビ・・・

その眼差しに、どれほど引き寄せられていただらつ

「僕は・・・」

トクン

「…せぬかさんが好きです」

トクツ・・・

息が・・・苦しい

「一・・・
・・・・・
・・・・・」

「……2年前からずっと」

前田先生

「今も」

前田先生

「……」

先生の顔が滲んでいく

涙が 溢れ出す

「まるかさん・・・」

ふわりと、クリーチクのにおいがする

先生の肩越しに、遊歩道の先だけが延々と見える

顔には先生の胸元が触れ、背中には先生の腕が回されている

耳元で先生の吐息を感じ、頬には先生の鼓動が伝わる

この瞬間を　どれほど夢見たことだろう

前田先生に抱きしめられる

体の全部で、「先生」を感じる

今ここに、「先生」がいる

「先生・・・」
「・・・ん?」
「・・・私も・・・」
「・・・」
「私も先生が」

背中の腕に、グッと力が入るのを感じた

「はるかさん・・・」

「・・・」

「あなたには・・・」主人がいる

「・・・」

「僕は・・・」主人からはるかさんを奪つつもりはないんです・・・

「・・・」

「自分の気持ちを優先して誰かを傷つけたり、苦しめたりするのは嫌なんです」

「・・・」

「それは『主人だけじゃなく、はるかさんも苦しめる』ことになる・・・

」

涙が、溢れる

「その後は結局、その罪悪感で・・・幸せを感じられなくなる」

「・・・だけど・・・」

「僕とはるかさんは・・・2人でいてはいけないんです」

「・・・」

「いくところまでいって、僕を好きになつたことを後悔して欲しくない・・・あなたに、辛い思いはさせたくないんです」

「・・・」

「2年経つた今・・・こうやつてあなたは、僕のところへ来ててくれた・・・いつまでもそんなふうに、想われていたいんです」

先生の想いが、痛いほど胸に響く

「これは2年前から出していた答えで・・・間違つていなかつたと思つてる・・・」

「・・・」

もつ、やめて

「はるかさんが治療に来るたびに・・・僕は嬉しかった。あなたに会えることも、あなたに少しだけ触れられることも・・・」

「・・・・・」

もつ、やめて

「一緒にラグビーを観に行つたこと・・・僕にとっては最高の思い出です」

もうこれ以上、好きにさせないで・・・！」

先生が右手で、私の後ろ髪を優しく撫でた

「一度でいいからこうして・・・あなたをこの腕に、抱きしめてみたかった・・・」

涙が溢れて 瞳が痛い

「・・・・・」

「・・・・僕は今・・・本当に幸せです」

前田先生が好き

こんなに

先生が好きなのに

ゆっくりと、肩が離れる

先生が真っ直ぐ私を見て

やわらかく微笑む

「泣かないで、はるかさん」

私の頬の涙を拭う

あたたかな、先生の手

私の腕を伝つて、両手を包む

「はるかさん」

「・・・はー」

「幸せになつてください」

「ー・・・」

「あなたの幸せが、僕の望みです」

声が出せず、ただ、一度頷いた

「ー・・・」

先生が、そう 望むなら

「あなたに会えて、僕は本当によかったです」

私も

「私も・・・先生に会えて・・・よかったです」

先生を好きになつてよかつた

先生の笑顔

先生の声

先生のぬくもり

先生の想い

忘れない

前田先生を

前田先生を好きになつた

自分を・・・

先生は、私の右腕をグンと力強く引いた。

最後に

痛いほど強く

私を抱きしめた。

中央通りのバス停は、深夜の最終バス間近だというのに、昼間のように人が多い。

「バス・・・大丈夫?人多そうだけど」

「ハイ、大丈夫です」

きっと、これが最後

「じゃあ・・・」

「・・・はい」

きっと、もう会わない

「・・・元気でね、はるかさん」

先生が、優しく笑う

「・・・前田先生も」

笑顔を向ける

「うん、ありがとう」

バスに乗り、窓から歩道に立つ先生を見つめる

貫ぐ」との出来ない 想いがある

結婚しても、いつも一人だった私に

人に恋する喜びを

もう一度感じさせてくれた先生

私を好きだと

言つてくれた

先生

さよなら

先生

前田先生

遠ざかる恋越しの先生と

こつまでも見つめ合っていた

これが私と先生の

本当の意味での

最後だった

ガチャガチャと、玄関の鍵が開けられる

「ただいま～」

「あ、おかれりい～」

バッグとお土産の入った袋を持って、和晃が帰つて來た。

「いやあ～疲れた疲れた

「どうだつた？大阪」

「いいねー！大阪、すごくいいよ！」

「ホント？」

「ん～、食べ物は美味しいし、人はみんな氣さくでおもしろいしさ」

「へええ～、いいなあー。」

「あ、はい、これお土産」

「わー！なになに？？」

「えつとねえ、はい、これが、たこやきまんじゅう、大阪あんプリ

ン、たこやきせんべい、たこやき羊羹・・・

「ちつ、ちよちよちよ、待つてよ、なんでお菓子ばっかなの？たこ

やき羊羹？？」

「そうそ、このたこやき羊羹がまた美味しいんだな～」

「お菓子ばっかりい・・・

「あ、一口餃子も買つてきたよ。なんかね、すごく有名な店なんだ

つて」

「え～！ホント！？食べよう今から～。」

「じゃあ、オレが焼いてあげよつ

「やつたー！」

私はいま

幸せです

前田先生の

望み通りに

先生の想い。（後書き）

この物語を、歯科医師M・S氏に捧ぐ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4953e/>

先生。 ~m e e t a g a i n ~

2011年1月14日14時36分発行